

# 「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などの機能

## The Functions of "nikagirazu," "dakede(wa)naku," and "kawari(ni)"

帰翔

### Abstract

This study focuses on the syntactic functions of "A nikagirazu B," "A dakede(wa)naku B," "A (no) kawari(ni) B," as well as the grammatical differences between phrases like "A to B," "A nado B," and "A totomoni B."

In Japanese, there are two primary ways to refer to linguistic units that are in a paradigmatic relationship. The first method is implied, where only one of A or B is explicitly mentioned, while the other is implied using phonological prominences, adverbial particles, or limiting adverbs. The second method is to explicitly indicate both A and B using compound particles such as "A nikagirazu B," "A dakede(wa)naku B," and "A (no) kawari(ni) B" and so on. While previous studies have noted that "A to B," "A nado B," and "A totomoni B" have the same function, it is unclear how they differ from the aforementioned compound particles.

The analysis of syntactic features in this study shows that "A nikagirazu B," "A dakede(wa)naku B" and "A (no) kawari(ni) B" cannot be regarded as single constituents. This not only demonstrates a grammatical distinction from other explicit markers but also establishes a foundation for considering "nikagirazu," "dakede(wa)naku," and "kawari(ni)" as a new category in the Japanese particle system.

### Keywords

範列関係、統合関係、並列表現、例示表現、複合辞

paradigmatic relation, syntagmatic relation, parallel coordination, exemplification expression, compound particle

## 1. はじめに

本稿は、現代日本語で「にかぎらず」「にとどまらず」「にくわえ(て)」「だけで(は)なく」「のみならず」「ばかりか」「ほか(に)」「かわり(に)」などがある共通の統語的機能を持つことについて考察する。

上述の諸表現には、例えば次の現象が指摘できる。

- a. 太郎 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか} 次郎も学校を休む。  
先生は花子 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか} 良子も褒めた。  
この魚は温帯 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか} 寒帯にも生息する。

点線で示した「太郎」と「次郎」、「花子」と「良子」、「温帯」と「寒帯」は述語を共有し、かつ、述語に対して同様な格関係を担うと解釈できる。これら点線の名詞は、一方では先行後行の統合関係にありながら、他方では同じ項の位置で置き換えられる同類の関係、即ち範列

関係にもあると言える。このように、括弧内の諸形式は、互いに範列関係にある名詞と名詞を統合関係上に並べる一種の表現手段として捉えられよう。

逆に、範列関係が認められない名詞と名詞を並べるbの場合、範列関係の体系に属する無数の候補から、一つだけを取り上げるcの場合、上述した表現は使えない。このことから、本稿が注目する諸表現は、範列関係にある二つ以上の言語単位を統合的に並べる表現手段として機能する。

- b. \* 太郎 {に限らず / だけではなく / ばかりか / のほか} 用事でも学校を休む。  
(cf. 病気 {に限らず / だけではなく / ばかりか / のほか} 用事でも学校を休む。)
- c. \* 太郎 {に限らず / だけではなく / ばかりか / のほか} 学校を休んだ。  
(cf. 太郎 {に限らず / だけではなく / ばかりか / のほか} 次郎も学校を休んだ。)

なお、これらの諸表現には、名詞と名詞に限らず、範列関係にある句と句や、節と節を並べることが可能なものもある。

- d. 激励の言葉は家族からばかりか、職場の人からも届いている。(＜名詞＋助詞＞句)  
彼は学問的にばかりか、人間的にも尊敬すべき方である。(副詞句)
- e. 太郎は病気で学校を休むばかりか、私用のためにも学校を休む。(節)

従って、以上に挙げた諸表現には次の共通性質があると指摘できよう。

- 基本的に自立せず<sup>(1)</sup>、様々な語句に付属して使用する
- 表現全体の表す意味は抽象的である
- 範列関係にある言語単位を統合関係上に並べるという統語的機能を果たす

これらの共通性質に注目して、上述した表現は同じカテゴリーに整理することが可能と思われる。本稿は特に第三の機能的な観点から、冒頭に挙げたこの種の表現を「範列関係にある二つ以上の言語単位を統合関係上に位置づける助詞的表現」と呼ぶ。以下では、これらの表現に同じ統語的機能を支える共通の文法的性質が存在することを実例で確認する。

なお、周知の通り、本稿が取り上げる諸形式は多義形式であることが少なくない。本稿は各形式が本稿で指摘する用法しか持たないと主張したいのではない。本稿は各形式が本稿で指摘する用法を有し、そしてその観点から、これら各形式が一つのカテゴリーとしてまとめられることを主張するものである。

(1) ただし、「加えて」「のみならず」「ほかに」など、文頭に現れて接続詞として機能する表現がある

## 2. 従来の指摘

従来の研究にも、「にかぎらず」などの機能の面に注目する議論は多くはない。しかし、それらの分析を見る限り、前掲の諸表現は文法的にどう位置付けるべきかはまだ定まっていない。

丹羽(2007:261)は「当該項目と範列関係にある他の項目との間の関係を表す」複合形式として、本稿の考察対象を含む多くの表現を提示している。ところが、これらの表現の構文論的性質はほとんど言及されず、その結果、後述のように、統語的な振る舞いが異なる表現が同じ体系に混在するという問題がある。

本稿の考察対象の統語的性質を取り上げた研究として、江口(2000,2006,2013)が挙げられる。江口氏の考察によると、「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などには以下の現象がある。

**【1】「に限らず」句はホスト名詞(注:下記の例の「次郎」)の左側から共起しなければならない。**

太郎は花子に限らず次郎も呼んだ。→\*太郎は花子に限らずφ呼んだ。  
→\*太郎は次郎も花子に限らず呼んだ。

**【2】「に限らず」句はホスト名詞(注:下記の例の「次郎」)と隣接する必要がなく、両者の間にはほかの文の成分(注:囲みで示す主題成分「太郎は」など)が挿入し得る。**

太郎は花子に限らず次郎も呼んだ。→花子に限らず太郎は次郎も呼んだ。

上の現象を根拠に、江口(2013:167)は、「花子に限らず」句は名詞「次郎」に依存する要素であると主張し、「花子に限らず次郎」全体をひとまとまりの「名詞句の拡張的な構造」(同:171)として分析している。

ところが、江口氏の分析にはいくつか説明できない現象がある。そのことについては、筆者(2022b)で論じたことがある。本稿の第5節ではそれに関連する現象を紹介する。

以上、従来の研究では「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などをひとつのカテゴリーとして整理する試みがあるが、これらの形式の文法的性質にはまだ検討する余地があると言える。

## 3. 「範列関係にある言語単位を統合関係上に位置づける」ことの概観

具体的な考察に入る前に、いわゆる「範列関係にある言語単位を統合関係上に位置づける」ことの意義を明確にしておきたい。その前提として、キーワードである「範列関係」と「統合関係」の定義から確認する必要がある。

・「**範列関係**」(英 paradigmatic relation)

連合関係、系列関係ともいう…(略)…範列関係とは、語、複合語、句、文など、同じ枠組み内の、同一位置に現れうるさまざまな言語単位の間に存在する関係を言い、連辞関係(syntagmatic relation, 統合関係とも)と対立する…(略)…同じ連辞(syntagme)の中で、2つまたはそれ以上の言語単位が相互に置き替え(substitution)のできる場合に、それらは範列関係にあると言える。(亀井ほか編著1996:1097, 下線は筆者)

・「**連辞関係**」(英 syntagmatic relation)

ソシュールの用語。統合関係ともいう。ソシュールによれば、言語単位が体系内で相互に依存して条件づけられる関係は、話線に沿った横軸と、話線を離れた縦軸の上にみられる。横軸上の、連鎖状に並ぶ2つまたはそれ以上の単位間の顕在的な関係が「連辞関係」であり、それと対立する縦軸上の、連想に基づく潜在的な関係が「連想関係」(英 associative relation)である。(同:1411, 下線、傍線は筆者)

・「**連想関係**」(英 associative relation)

ソシュールの用語。連想関係とは、われわれの脳裏で、形態上・意味上の共通性あるいは類似性から連想によって喚起され、同じ話線内では相互に排除される言語単位間に存在する潜在的な関係を言い、連鎖上に並ぶ言語単位間の顕在的な関係である連辞関係(英 syntagmatic relation)と対立する…(略)…のちにイエルクスレウが連想関係に代わって「範列関係」(paradigmatic relation)という術語の使用を提唱し、今日ではそれが一般的になっている。(同:pp.1414~1415, 下線、傍点は筆者)

このように、範列関係(又は連想関係)と統合関係は、それぞれの系列に属する単位が文中に顕在するかどうかという点において根本的に異なる。統合関係によって結ばれる単位は全く連辞の中に顕在するのに対し、範列関係の系列にある単位は一個を除き、表面に顕在し得ない。上の解説で統合関係を「顕在的な関係」、範列関係を「潜在的な関係」として呼び分けているのはこの違いを端的に示している。

実は、本稿が「範列関係にある複数の言語単位を統合関係上に位置づける」ということに注目する契機はこの違いの中に孕まれていると思われる。

一次的に展開する文の中で、同じ位置に二つ以上の単位が同時に現れることはあり得ない。その結果、例えば「先生は花子を褒めた」のヲ格名詞「花子」と交換できる単位が無限に考え得るにもかかわらず、文中に顕在しないため、それらを意識する人はいない。

このように、或る言語単位と範列関係にある潜在の言語単位は、特別な表現手段がない限り、意識されることがない。言い換えると、或る単位とほかの単位が互いに範列関係にあることを表すには、専用の言語手段が要請されるのである。

範列関係を表す言語手段には具体的にどんな表現があるか。日本語を例に言うと、それ

は大きく暗示的方法と明示的方法との二種類の方法に分けられる。

まず、暗示的方法とは範列関係にある言語単位そのものを言語化せず、ほかの表現を明示することでそれを推論させるということである。これに対応する具体的な例として、以下の(1a)のようにプロミネンスを利用して焦点を表すものや、(1b)と(1c)のように助詞や副詞を利用して特定箇所を取り立てるものがある。いずれも、範列関係にある同類事物が顕在しないものの、それらの存在が含意として読み取れる。

- (1) a 先生が 花子 を褒める。(「花子」を特に強く発音する)  
b 先生が 花子 {だけ／ばかり／も／でも／など} 褒める。  
c 先生は 特に 花子 を褒める。  
せめて 花子 を褒めてほしい。

一方、明示の方法とは、元々潜在していた単位に一定の統語的役割を付与し、連辞の構成要素として統合関係に取り入れることである。この方法は、単に範列関係にある単位Aと単位Bを並べればよいというわけではなく、並べられる単位Aと単位Bが互いに置き換えられるという範列関係の特性が読み取れなければならない。具体的な表現としては、少なくとも以下のものが挙げられる。

【本研究の考察対象】

- (2) a 太郎 {に限らず／だけではなく／に加えて／のほか(に)} 次郎 もそのサークルに参加した。  
b 太郎 {ではなく／のかわり(に)} 次郎 がそのサークルに参加した。

【並列表現(並置表現も含む)<sup>(2)</sup>】

- (3) a {太郎と次郎／太郎や次郎／太郎か次郎} がそのサークルに参加した。  
b {太郎も次郎も／太郎でも次郎でも} サークルに参加してほしい。

【例示表現】

- (4) 太郎 {など／をはじめ} すべての学生 が学校を休んだ。

【その他の表現】

- (5) a 次郎 は 太郎 {と同様に／と違って} 学校を休んだ。  
b 次郎 は 太郎 {に先立って／と同時に／の次に} 大学に進学した。  
c 次郎 は 太郎 {とともに／とは別に} 食事をした。

(2) ここで言う「並列」と「並置」はそれぞれ山田(1936:996)の「句の複雑なる構成」における「一の位格内における語の数多きもの」と「同一の位格の数多きもの」に対応する。なお、「並置」という用語は芳賀(1962)による。

上の例では、点線名詞「太郎」と「次郎」、又は「太郎」と「すべての学生」は述語を共有する。そして、前後の点線名詞はともに述語動詞の動作主として解釈し得る。従って、次のように、点線名詞はともにガ格項の位置で交換でき、即ち範列関係にあると解釈できる。

〔太郎〕が 述語      〔太郎  
次郎〕が 述語

このように、いわゆる「範列関係にある言語単位を統合関係上に位置づける」こととは、元々同じ位置で縦に並ぶ単位同士を(2)～(5)のように継起的に並べる、ということである。並べられた単位は一方では先行後行の統合関係にありながら、他方では互いに置き換えられるという本来の範列関係は解釈として変わらない。

上の考え方は先行研究ですでに指摘されている。例えば、中俣(2015)は並列関係の定義として以下のことを述べている。

並列関係とは、元来範列的關係にあった要素を、言語の線条性に従って統合的に並べなおした関係である。

(中俣2015:7, 下線は筆者)

本稿は中俣氏の指摘に従いながら、上の指摘は並列関係だけではなく、もっと広い範囲の現象にも適用すると考え、前掲した(2)～(5)をすべて「範列関係にある言語単位を統合関係上に位置づける」文と扱う。ただし、これは(2)～(5)の下線部表現はすべて同じ文法的性質のものとして捉えることを意味しない。

以下では、本稿が注目する「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などの統合的特徴を、ほかの表現と比較しながら検討していく。

#### 4. 「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などによって並べる言語単位

本節では、前述した内容を検証し、本研究が注目する助詞的形式に「範列関係にある複数の言語単位を統合関係上に位置づける」という共通の統語的機能があることを実例で確認する。

先に結論を言うと、「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などによって並べられる言語単位は、典型的に範列関係にあると認められる場合が最も一般的である。この場合、並べられた単位Aと単位Bは、AB以外の文要素を共有して、かつAB以外の文要素に対して同様な統語的な役割を持つと解釈し得る。

前節で確認したように、互いに範列関係にあるものは、同じ位置で置き換え可能でなければならない。この条件に当てはまるAとBは、どんなレベルの単位であっても、互いに範列関係にあると認められる。本研究の考察対象は原則的に語、句、節、即ち文を構成する基本的な単位を連辞上に顕在させ、それと範列関係にある語、句、節と並べる。どんな単位を

顕在させるかは、個々の形式の語構成によって異なる。

- (6) a 太郎 {に限らず／に加えて／だけではなく／ばかりか} 次郎も学校を休んだ。  
語(名詞) 語(名詞)
- b 彼は病気で {だけではなく／のみならず／ばかりか}、私用のためにも休む。  
句(名詞+助詞) 句(名詞+形式名詞+助詞)
- c 太郎は病気で休む {だけではなく／のみならず／ばかりか}、私用のためにも休む。  
節 節

上に示すように、「にかぎらず」「にくわえて」など<格助詞+用言>の構成を持つ形式は名詞と準体句にしか付加できず、従ってそれによって並べられる単位は名詞と準体句に限る。一方、「だけで(は)なく」「のみならず」「ばかりか」など、副助詞から始まる構成を持つ形式は語、句、節のすべてに付属でき、従って、これらの形式によって並べられる単位は語、句、節の全部にわたる。

本研究の考察対象の中で代表的な形式の一つである「だけで(は)なく」を例に、それによって並べられる単位の間にある範列関係を確認しよう。

#### 【語と語】

- (7) 過去の役者の写真には、彼らの風貌や柄だけではなく、その役になりきろうとする気魄と持ち味があらわれているものです。  
(歌舞伎通)
- (8) 撮影のためなら靴だけではなく、帽子とか洋服も身につけてもおかしくはない。  
(ニッポン靴物語)
- (9) 「お願いします。ただ、そのアリバイ証人が愛人だけに、口裏を合わせる可能性もあるので、その点も宜しく…」 「そうですね。女のアパートだけではなく、その近所にも当らせましょう。光次郎の写真はありますか?」と、時枝は聞いた。  
(巡査失踪)

#### 【句と句】

- (10) そこにはドイツ語圏からだけではなく、世界各国から留学生が集まってきた。  
(アメリカ大学への旅)
- (11) しかも、グルジアは人的にだけではなく、経済的にも豊かな国だ。  
(国際情報 just now)

【節と節】

(12) ムハンマドは、イスラームの教えを口頭で解説しただけでなく、その真の意図を実践的に行動で示したのであった。

(キーワードで読むイスラーム)

(13) 逆に、健康で自立した生活を送り、医療費を減らしていくことができれば、皆さんの負担が軽くなるだけでなく、その人の人生も楽しく充実したものになります。

(広報つくばみらい)

まず、語レベルの範列関係を扱う(7)~(9)から見よう。これらの例では、先行する名詞と後行する名詞は述語を共有し、かつ、前後の名詞は述語に対して同様な格関係を担うと解釈できる(例7から順次にガ格、ヲ格、ニ格と解釈可能)。従って、点線で示す前後の名詞は同じ格項目に現れ得る、なおかつ、どちらの名詞が現れても述語に対する格関係は変わらない、即ち前後の名詞は範列関係にあると言えるのである。

以上分析した名詞の間にある範列関係を図で示すと、それぞれ次のようになる。

(7') …写真には、〔彼らの風貌や柄  
その役になりきろうとする気魄と持ち味〕があらわれている…

(8') 撮影のためなら、〔靴  
帽子とか洋服〕を身につけても…

(9') 〔女のアパート  
その近所〕に当らせましょう

次に、句と句を並べる(10)と(11)について見る。(10)では、先行句「ドイツ語圏から」と後行句「世界各国から」は同じ述語「集まってきた」を共有して、かつ、どちらの句でも“移動の起点”を表す補充成分と説明し得る。(11)では、先行する副詞句「人的に」と後行する「経済的に」は同じ述語「豊かな」を共有し、かつ、どちらの句でも、述語が表す属性の“範囲”或いは“領域”を規定する修飾成分であると解釈できる。したがって、前後の句は述語を共有して、そして同様な対述語成分として置き換え可能な関係、即ち範列関係にあると判断できる。

この場合の句と句の範列関係は次のように表示できる。

(10') そこには 〔ドイツ語圏から  
世界各国から〕 留学生が集まってきた。

(11') グルジアは 〔人的に  
経済的に〕 豊かな国だ。

最後に、節と節を結む(12)と(13)について説明する。(12)では、先行節「イスラームの教えを口頭で解説した」と後行する節「その真の意図を実践的に行動で示した」は、同じ話題



についての解説として解釈できる。前後二つの節は、同じ題目成分を共有して、それぞれ〈テーマレーマ〉の構造を形成していると言える。そして、(13)では、前後二つの節が表す事態内容は、同じ条件によって引き起こされると解釈できる。いわば、前後二つの節は同じ条件節を共有して、〈原因帰結〉の論理的展開を持つ主従構造を形成していると言える。このように、波線で示される前後の節は、共有する文成分に対して同様な統合関係を持ち、即ち範列関係にあると判断できる。

(12') ムハンマドは、イスラームの教えを口頭で解説した  
その真の意図を実践的に行動で示したのである

(13') 健康で……ことができれば、みなさんの負担が軽減される  
その人の人生が楽しく充実したものになる

以上、「だけで(は)なく」の実例を用いて、様々なレベルの言語単位における範列関係を確認した。いずれの場合も、点線で示した前後の単位は、或る位置でほかの文の成分に対して同様な役割を持ち、どちらの単位が現れてもその役割は変わらないという共通性が指摘できる。上の考察に基づき、本研究で言う“範列関係にある”ことの判定基準を改めて次の通りに規定する。

言語単位AとBは範列関係にあるかどうかは、AB以外の位置に現れるほかの文要素との統合関係は同じかどうかによって決められる。ほかの文中要素に対して同様な統合関係を持つ場合は範列関係にあると判断できる。

## 5. 「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などの統語的特徴

本節では、「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などどのように範列関係にある言語単位を連辞上に並べるかに注目し、3節で挙げられた様々な表現と比較しつつ、上述した形式にどんな統語的特徴があるか事実整理を行う。

### 5.1 並列表現との違い

「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などの助詞的形式を並列表現と比べると、二つの違いが見てとれる。

一つは、江口(2013)でも指摘されているように、並べられる単位同士の間には外部要素の挿入は許されるか否かという点である。並列表現によって並べられる構造の内部に、ほかの文の成分の挿入が許されない。この点は次の中俣(2015:7)が指摘した現象から窺える。

(14)a 太郎は花子に手紙とプレゼントを贈った。

b 太郎は手紙とプレゼントを贈った。花子に。

c 太郎は花子に贈った。手紙とプレゼントを。

d\* 太郎は花子に手紙を贈った。プレゼントと。

(中俣 2015 : 7, 例 7, 下線、点線、太字は筆者)

(14c)のように、並列構造「手紙とプレゼント(を)」はひとまとまりの名詞句として述語より後置できるのに対し、(14d)では並列構造の一部である「プレゼントと」だけを後置すると非文になる。これは並列構造の内部要素は直接文を構成せず、並列構造という統語的なひとまとまりになってはじめて文を構成するからと一般的に説明される。

それに対して、本稿が注目する一連の表現によって並べられる単位同士の間、外部要素が挿入する現象が多く見られる。ここでは、「にかぎらず」の実例で確認する。

(15) 教育用コンピュータに限らず、学校には 電子式複写機、印刷機等がレンタル・リース方式によって導入されている。

(校長・教頭のための学校施設・事務管理百科)

(16) それは近年まで、ちゅう木に限らず トイレで 固い紙などを用いていた場合、普通は便池に落とさず、別に使用済みのものを箱に入れて、焼却したり川へ流したりしている例があるからだ。

(考古学推理帖)

(17) 近世初期の女性の心性をさぐる論考であるが、初期に限らず 「内治」は、その後の時代まで長く近世の家と女性にながしかの影を落している。

(女と男の時空)

並列構造とのもう一つの違いは、並べられる単位同士はひとまとまりとして取り立てられるかどうかということである。つぎの(18)と(19)を比較しよう。

(18) 先生は花子 {に限らず/だけではなく/に加えて/のほか(に)} 良子も褒めた。

(19) (先生は道子を褒め、) そして、先生は花子と良子も褒めた。

上の二文では、名詞「良子」の直後に助詞「も」が現れている点で同じであるが、「も」の作用域はどこまで届くかで異なる。(18)は「先生が褒めた人に花子も良子もいる」と解釈され、「花子、良子以外にさらに誰かも褒めた」という意味は読み取れない。したがって、この場合の助詞「も」は「良子」だけを取り立てていると言える。一方、(19)は「花子、良子以外にほかの誰かも褒められた」ことを意味し、即ち、この場合の「も」の取り立てる対象の範囲に「花子」と「良子」の両方が入っていると言える。

このように、「にかぎらず」「だけで(は)なく」などによって並べられる単位Aと単位Bは、かりに「AにかぎらずB」「Aだけで(は)なくB」のように隣接して現れても、「AとB」「AやB」のようにひとまとまりとして捉えることができないのである。

以上の考察をまとめると、本稿の考察対象はa)並べられる単位同士の間外部要素の挿入は許される(江口2013)、b)並べられる単位同士はひとまとまりとして取り立てられないという二点で並列表現と区別できると言える。

## 5.2 例示表現との違い

3節で概観した通り、例示表現によって並べられる「部分」にあたる単位と、「集合」にあたる単位が互いに範列関係にあると言える場合がある。ここでは、「をはじめ」の実例で確認する。

- (20)だが、この日はブラジル人をはじめ、倍の千人以上が申し込んでいたようだ。  
(激闘ワールドカップ'98)
- (21)後に、一般市民に伝わって正月七日の七草粥の行事へと広まっていった。セリをはじめ、いろいろな若草(七草)に不老長生を願って…  
(王朝の植物)

点線部分の名詞が互いに範列関係にあることは次のように図で示すことができる。

- (20') この日は  $\left[ \begin{array}{l} \text{ブラジル人} \\ \text{倍の千人以上} \end{array} \right]$  が申し込んでいた……
- (21')  $\left[ \begin{array}{l} \text{セリ} \\ \text{いろいろな若草(七草)} \end{array} \right]$  に不老不死を願って……

意味的に考えると、単位Aが単位Bに包含される部分であるとすれば、集合であるBについて叙述する場合、Aは必ずBの一部として事態の中に含まれると考えられる。この意味的特性により、上のように「部分」にあたる点線名詞は「集合」にあたる点線名詞と述部を共有する。

ところが、この解釈は、あくまで述部事態が集合に属するすべての部分要素にあてはまる場合だけ成立する。部分にあたる単位は必ずしも集合にあたる単位と述部を共有するとは限らない。

- (22)学者閣僚の竹中平蔵氏をはじめ、小泉政権の周囲には首をかしげたくなるような「民間人や学者」が多すぎるからです。  
(泣くより怒れ)
- (23)当時すでに革命的ロマンティズムは跡形もなく拭い去られ、エッセニンをはじめ、動揺した作家・詩人らの自殺が相次いでいた。  
(幻の作家たち)

(24) 日商岩井をはじめ下位の総合商社に共通の問題は、自己資本に対してふくらみすぎた有利子負債をいかに返済し、収益力向上を図るかだ。

(週刊ダイヤモンド)

(22') 小泉政権の周囲には〔\*学者閣僚の竹中平蔵氏  
くびをかしげたくなるような「民間人や学者」〕が多すぎる。

(23') 〔\*エッセーニ  
動揺した作家詩人ら〕の自殺が相次いでいた。

(24') 〔??日商岩井<sup>(3)</sup>  
下位の総合商社〕に共通の問題は……

(22')～(24')が示すように、並べられる点線部分はほかの文の成分を共有しない。したがって、上の文は「部分-全体」の意味関係にある言語単位を並べるが、本稿が注目する範列関係にある言語単位を並べる文とは異なる。このことは、次の例からさらに端的に見てとれる。

(25) 二十三年前「難民を助ける会」を設立。その活動は難民や被災民の支援をはじめ、多岐にわたっている。

(サライ)

### 5.3 その他の表現との違い

次に、3節で「その他の表現」として取り上げた形式(以下再掲)との違いについて検討する。

(26)a 次郎は太郎 {と同様に/と違って} 学校を休んだ。

b 次郎は太郎 {に先立って/と同時に/の次に} 大学に進学した。

c 次郎は太郎 {とともに/とは別に} 食事をした。

(26a)は単位Aと単位Bの「異同」を述べる表現であり、即ち、二つの対象が或る事態に当てはまるか否かを問題にする表現であると言える。(26b)は単位Aと単位Bは同じ事態を行うときの時間的な前後関係を表す表現である。(26c)は単位Aと単位Bが同じ事態を行うときの、「共同・分離」の様態を表すものと言える。これらの表現は、同一事態を介して単位Aと単位Bを関連づけるという共通性が考えられる。従って、点線名詞が述語を共有し、互いに範列関係にあるという解釈が出やすい。

これらの形式は、丹羽(2007)は本発表の考察対象とともに「複合副助詞」として一括している。ただし、以下に示すように、これらの諸形式は「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などは、やはり統語的な振る舞いが異なる。

まず、「異同」を表す「と同様に」「と違って」は渡辺(1971:333)で「誘導対象に対する角度

(3) 二格位置の名詞を集合として解釈できる場合この解釈は可能であろう。

を変えた説明、第三者的な説明」の「誘導成分」と説明されている。これらは、話者の批評や注釈を表す「悲しくも」「もちろん」と同様に、誘導される事態内容を主語にする文の述部になることが可能である。

- (27) a 悲しくも、念願の学校に落第した。 → 念願の学校に落第したのは悲しい。  
b もちろん、直接本人に聞いた。 → 直接本人に聞いたのはもちろんだ。  
(28) a 次郎は太郎と同様に学校を休んだ。 → 次郎が学校を休んだのは、太郎と同様だ。  
b 次郎は太郎と違って学校を休んだ。 → 次郎が学校を休んだのは、太郎と違う。

しかし、「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」なのによって並べられる単位は、上のような言い換えはできない。

- (29) a \*次郎も学校を休んだのは、太郎 {に限らず／だけではない}。  
b \*次郎が学校を休んだのは、太郎のかわりだ。

次に、通常連用修飾成分の副詞句として考えられる (26b) と (26c) について確認する。これらの副詞句には次の現象が指摘できる。

- (30) 次郎 {に先立って／と同時に／の後に} 太郎が大学に進学した。  
→ a 太郎が次郎 {に先立って／同時に／の後に} 大学に進学した。  
→ b 次郎 {に先立って／同時に／の後に} 大学に進学した太郎  
(31) 次郎 {とともに／とは別に} 太郎が食事をした。  
→ a 太郎が次郎 {とともに／とは別に} 食事をした。  
→ b 次郎 {とともに／とは別に} 食事をした太郎

このように、a)「次郎に先立って」や「次郎とともに」などの句は「太郎が」との語順が入れ替えられる、b)「太郎」は「次郎に先立って」や「次郎とともに」などの句と同じ節で共起しなくてもよい。これは、江口(2013)が指摘した左側から共起するという制限を持つ「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などとは明らかに異なる。

- (32) 太郎 {に限らず／だけではなく／に加えて／のほか(に)} 次郎も学校を休んだ。  
→ a\* 次郎も太郎 {に限らず／だけではなく／に加えて／のほか(に)} 学校を休んだ。  
b\* 太郎 {に限らず／だけではなく／に加えて／のほか(に)} 学校を休んだ次郎。

(33) 太郎 {ではなく／のかわり (に)} 次郎が学校を休んだ。

→ a 次郎が太郎 {\*ではなく／??のかわり (に)}<sup>(4)</sup> 学校を休んだ。

b 太郎 {\*ではなく／??のかわり (に)}<sup>(5)</sup> 学校を休んだ次郎

このように「その他の表現」は前節で確認された例示表現と同様に、範列関係にある単位Aと単位Bを並べるといふ解釈が成り立つ場合もあるが、上に挙げた現象から見れば、「その他の表現」は常に範列関係にある言語単位を統語的に並べるわけではない。したがって、丹羽(2007)が「複合副助詞」として挙げた体系のなかに、統語的な振る舞いが異なる表現が混在していることが言える。

#### 5.4 結論

以上の考察をまとめると、3節で概観された「範列関係にある複数の言語単位を統合関係上に位置づける」といふ表現のうち、本稿の考察対象と並列表現だけが本質的に上述した機能を担うものである。例示表現や「その他の表現」が現れる構文は常に範列関係にある単位Aと単位Bを並べるわけではない、という結論が得られる。

#### 6. 範列関係にある言語単位を統語関係上に位置づける表現の全体像

ここでは「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などの統語的特徴を再整理する。

【特徴一】この種の助詞的形式は原則的に範列関係にある二つ以上の単位を並べなければならない。副助詞・係助詞と異なって、一個だけの単位を取り立てる用法を持っていない。

(34) a 先生は花子 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか (に)} 良子も褒めた。

→ \*先生は花子 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか (に)} φ褒めた。

b 先生は花子 {ではなく／のかわり (に)} 良子を褒めた。

→ \*先生は花子 {ではなく／のかわり (に)} φ褒めた。

(4) 「かわり(に)」の実例では「B格助詞AのかわりにP(Pは述語)」「[AのかわりにP]B」構文が許される場合がある。この場合、単位Bが担う格関係の種類はガ格とヲ格に限られ、かつ、述語Pの意味が限られている。これらの条件を満足しない次の作例ではやはりこれらの構文は許されない。その点について筆者の実例考察がある(帰2022a)。

鎌倉のかわりに、広島に行った。

→ \*広島に鎌倉のかわりに行った。

\*鎌倉のかわりに行った広島(もきれいだ)

(5) 同上

【特徴二】この種の助詞的形式は、統合関係上に並べられた二つ以上の単位のうち、先行する単位にだけ付属し、後行する単位には付属しない<sup>(6)</sup>。

- (35)a 先生は花子 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか(に)} 良子も褒めた。  
→ \*先生は花子も良子 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか(に)} 褒めた。  
b 先生は花子 {ではなく／のかわり(に)} 良子を褒めた。  
→ \*先生は花子を良子 {ではなく／のかわり(に)} 褒めた。

【特徴三】この種の助詞的形式が並べる単位Aと単位Bは、必ずしも隣接する必要がない。即ち、「Aに限らず」「Aだけで(は)なく」「Aのほか(に)」とBとの間にほかの文の成分(例えば、次の囲いで示す主題成分「先生は」)が現れ得る。

- (37)a 先生は花子 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか(に)} 良子も褒めた。  
→ 花子 {に限らず／だけではなく／ばかりか／のほか(に)} 先生は 良子も褒めた。  
b 先生は花子 {ではなく／のかわり(に)} 良子を褒めた。  
→ 花子 {ではなく／のかわり(に)} 先生は 良子を褒めた。

【特徴四】この種の助詞的形式によって並べられる単位Aと単位Bを統語的なひとまとまりとして取り立てることはできない。

- (37)a 先生は花子に限らず、良子も褒めた。(「良子」のみ取り立てる)  
b 先生は道子を褒めた。そして、先生は??花子に限らず、良子も褒めた。  
(「花子」と「良子」の両方を取り立てる)

(6) 三つ以上の単位を並べる場合、原則的に最初の単位にだけ「に限らず」が付加する。

虐待、ネグレクトの対象は、女性に限らず、子ども、老人も含めている。  
(ドメスティック・バイオレンスへの視点)

ただし、実例では「Aに限らずBに限らずC」のように、三つの単位A、B、CのAとBの両方に「に限らず」が付属する文が見られる。これは、接続詞「また」に注目すれば分かるように、「アランに限らず」と「西洋哲学に限らず」の並置と言える。

しかし、よく考えるとそれはアランに限らず、また西洋哲学に限らず、東洋の哲学もまた密かにその使命としたところの、自由人の真理探究生活の完成であり、その知恵に他ならない。  
(共生への問いとしての教育学)

また、三つ以上の単位のうち、二番目の単に付属するよう見える例もある。この場合、「に限らず」の前にある「外国語風、日本風」は一つの並列名詞句と考えられる。

外国語風、日本風に限らず、呼びやすさ、読みやすさ、そして書きやすさを大切にすることも忘れないでください。  
(しあわせ赤ちゃんのすこやか名前事典)

以上をまとめると、本研究の考察対象の統語的特徴は次のように集約できると思われる。

- 「Aにかぎらず」「Aだけで(は)なく」「Aかわり(に)」句は単位Bと左側から共起しなければならない。
- 「Aにかぎらず」「Aだけで(は)なく」「Aかわり(に)」句は単位Bと統語的なひとまとまりを構成しない。

従来の記述から上の統語的特徴を持つ表現を掬い上げると、次の表の通りに整理できる。

表1 範列関係にある言語単位を統合関係上に位置づける助詞的表現の一覧

国立国語研究所 (1951)	森田・松木 (1989)	グループ・ジャマシ (1998)	山崎・藤田 (2001)	丹羽 (2007)	江口 (2013)
だけで(は)なく	どころか	かわりに	かわりに	以外(に)	以外(に)
どころか	にかぎらず	だけで(は)なく	どころか	かわりに	だけで(は)なく
のみならず	のみならず	で(は)なく(て)	にかぎらず	だけで(は)なく	にかぎらず
ばかりか	ばかりか	どころか	にくわえ(て)	どころか	にくわえ(て)
ばかりで(は)なく	をはじめ	にくわえ(て)	のみならず	にかぎらず	のみならず
はもちろん		にとどまらず	ばかりか	にくわえ(て)	ばかりか
はもとより		のみならず	をはじめ	のみならず	ほか(に)
		はおろか		はおろか	をはじめ
		ばかりか		ばかりか	
		はもちろん		はもちろん	
		はもとより		ほか(に)	
		をはじめ		をはじめ	

## 7. まとめと今後の課題

本稿は、「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などの表現が担う「範列関係にある言語単位を統合関係上に位置づける」という統語的機能とは何かを概観し、その上、同じ機能を担うと見える諸表現と比較し、「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などが持つ同じ機能を支える統語的特徴を検討した。

前述の通り、統語的機能という共通性に注目すれば、これらの諸形式は一つのカテゴリーに整理することが可能と思われる。それを考えるにあたって、さらに二つの問題点を検討しなければならない。

一つは、これらの表現は一個のまとまった形式として認められるかどうかという問題である。前掲の表現のうち、「ばかりか」「どころか」を現代語では一語化した形式の例として挙げられるが、「に限らず」「だけではなく」「に加えて」「ではなく」などは前接する文要素とともに節述語の中止用法として分析可能な表現は一語かどうか疑わしい。このように、これらの表現は一個の助詞的形式として処理できるかどうかという単語認定の問題がまずあると言える。



もう一つは、仮に上の表現が一個の助詞と言えたとすれば、これらの形式を伴わせることによってどんな文の成分が作れるかという問題である。この問題を考えることは、この種の諸形式をほかの種類助詞と区別しつつ、その統語的性質を記述するために必要であるし、本稿が目指す、範列関係にある単位と単位がどのように文の組み立てに参加するかという問題にも重要な意義がある。この問題については、本稿ではごく簡単に言及しただけにすぎず、今後、本格的な考察が必要である。

帰翔（きしょう、GUI Xiang）  
東京外国語大学大学院博士後期課程

## 参考文献

- 江口正（2000）「「ほか」の2用法について」『愛知県立大学外国語学部紀要言語・文学編』32, pp.291～310
- 江口正（2006）「集合を設定する「ウチ」の分布特性」, 藤田保幸；山崎誠（編）『複合辞研究の現在』, 和泉書院, pp.235～247
- 江口正（2013）「集合操作表現の文法的性質」, 藤田保幸（編）『形式語研究論集』, 和泉書院, pp.155～175
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）（1996）『言語学大辞典 第6巻術語篇』
- 帰翔（2022a）「「Nのかわりに」句に関する一考察—文中における語順に注目して—」『言語・地域文化研究』28, pp.41～56, 東京外国語大学大学院総合国際学研究所
- 帰翔（2022b）「「Nのかわりに」句に関する一考察—文中における語順に注目して—」『日本語・日本学研究』12, pp.1～16, 東京外国語大学国際日本研究センター
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』, くろしお出版
- 国立国語研究所 [永野賢]（1951）『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』, 秀英出版
- 中俣尚己（2015）『日本語並列表現の体系』, ひつじ書房
- 丹羽哲也（2007）「範列関係を表す複合副助詞」『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』58, pp.247～261
- 芳賀綏（1962）『日本文法教室』, 東京堂
- 森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』, アルク出版
- 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』, 宝文館
- 山崎誠・藤田保幸（2001）『現代語複合辞用例集』, 国立国語研究所
- 渡辺実（1971）『国語構文論』, 塙書房

## 用例出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』国立国語研究所(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>)

